

- 5 R. E. ダンラップ/A. G. マーティグ編、満田久義監訳『現代アメリカの環境主義  
1970から1990年の環境運動』(ミネルヴァ書房) 1993. 12、P272、¥3,000  
国立環境研究所 青柳 みどり

これは、Riley E. Dunlap and Angela G. Mertig ed., "American Environmentalism (The U.S. Environmental Movement 1970 -- 1990)" Taylor & Francis New York (1992) の監訳であり、さらに監訳者による最新の地球環境にかかる国際市民意識調査の結果(原著者であるDunlap教授とギャラップ社が行なった)についての解説を加えたアメリカの環境保護運動の20年間の総括である。公害反対運動だけではない、広い意味の環境保護運動が漸く根付き始めてきた日本の状況からみて、時宜を得た出版といえよう。アメリカにおいては、合衆国全土を対象にした保護運動、議会や立法府への積極的なロビー活動、優秀な専任スタッフ、国際的な活動とむしろ積極的に政策と関わり合ってきた。日本においては、水俣などの公害反対運動など環境保護運動は、環境政策に関しては傍観者的な立場におかれてきたことと対照的である。

本書はアメリカ特有の問題も取り上げている。マイノリティ問題と環境問題である。環境保護運動は、知識階層の白人が好んで取り上げる問題と見なされる傾向にあった。しかし、有害廃棄物の処理場の立地問題等生命に危険となるような問題がクローズアップされるにつれて、弱者すなわちマイノリティへのしわ寄せが起きていることが指摘されるようになった。白人の "NIMBY = Not In My Back Yard" = マイノリティにとっての "That's In Our Back Yard" である。ここから "NIABY" = Not In Anyone's Back Yard" が叫ばれるようになったのだが、この辺りの草の根運動の動きが日本の読者に新しい切り口を与えるであろう。

蛇足ではあるが、原著者であるDunlap教授と監訳者の間柄、業績からみても、監訳者は本書を日本に紹介するにおいて適任であると紹介しよう。